

「個性化教育」の再定位と協働的な学びの授業デザイン

－「学ぶ側の論理」に立脚した 主体的・対話的で深い学びの実践的探究－

学籍番号 (249345)

氏 名 (西浦 博久)

主指導教員 (森本 和寿)

副指導教員 (原口貴美子)

1. 本実践研究の背景及び目的

本研究は、「個性化」概念を改めて問い直し、「学ぶ側の論理」に立った個性化教育を、学校現場でどのように実現できるかを理論と実践の両面から検討するものである。中央教育審議会答申（令和3年）は、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現を掲げ、「個に応じた指導」の重要性を強調している。しかし現実の学校現場では、学ぶ意義を見いだせず、主体的に学びに向かえない子どもが多いことが指摘されており、教育の目的と方法の再構築が求められている。日本の教育では大正期以降、「個性の尊重」が重視されてきた一方で、個を孤立させる「個性化」幻想とも批判されてきた。そこで本研究は、学習指導要領の変遷や日本個性化教育学会の提案から、「個」と「共同」の新たな関係構築を理論と実践の両面から提示することを目指す。

1-1 「個性」重視の教育的機運

現代で広く用いられる「子ども主体の学び」や「個別最適な学び」は新しい概念ではなく、20世紀初頭のジョン・デューイの教育思想にその源流がある。デューイは、教育の中心を教師から子どもへと移し、子どもの経験や興味、自発性を基盤とする学びを重視した。この思想は大正期の新教育運動に影響を与え、日本では木下竹次による「奈良の学習法」として具体化された。木下は、個別的に学ぶ「独自学習」と、集団で学ぶ「相互学習」とを往還させることで、学びの質を高めていった。奈須正裕も、独自学習と相互学習が相互に学びを深め合う関係にあると指摘している。こうした大正期からの実践は、今日の「個別最適な学び」が単なる個別化にとどまらず、子どもの内発性と協働性を結びつけた学びとして再構築される必要性を示している。

1-2 「個性」への批判

日本における「個性」という概念は、明治初期に“individuality”が導入されたことに始まる。当初は生理的・身体的・心理的な差異を示す言葉であったが、1900年代以降、学習における能率主義や効率主義を重視する教育思想と結びつき、文化的・社会的差異としての意味をもつようになった。大正自由教育の中で「個性化」は広く普及したが、その過程で序列化を生み、「生活」「体験」などが目的化・規範化される問題も生じた。佐藤学は、教育的

潮流の中にあって、「個性」という概念が、子どもを孤立させ、国家のための人材育成の装置として働いていた「個性化」幻想として批判している。

1-3 「個性化」幻想を超えて

「個性化」幻想を超える教育とは、「自由」と「共同体」とを統合する新たな個性化教育であるとする。子どもの興味や生活背景に応じた支援を出発点に、教材を介した教師との共同的追究や、対話・協働を通して学びを深める「子どもが主語」の授業が求められる。きのくに子ども村学園の実践は、ニールの「感情の自由」とデューイの「知性の自由」とを統合する具体的な教育像を提示している。ただし自由は放任ではなく、他者との関係の中で自己統制を伴うものである。地域と結びついた学びや学習共同体の形成により、孤立や格差を避け、子どもが主体的に問い、社会に参加する力を育てる教育が重要である。

2. 日本における「個に応じた指導」の展開

戦後教育改革以降の学習指導要領の変遷を通して、「個に応じた指導」がどのように位置づけられ、実践的に展開されてきたのかを明らかにする。社会的要請の変化とともに形成されてきた「個に応じた指導」の理念的基盤を整理し、次に学習指導要領の改訂にみられるその概念の具体的変容を検討する。また、オープン・スクールの誕生と個別化教育を背景に発足された全国個性化教育研究連盟のあゆみについて述べていく。

2-1 現代的課題に対応する個性化教育について

現代的課題に対応する個性化教育の在り方として、「協働的な学び」の重要性を明らかにしている。佐藤が指摘する「個性化」幻想の問題を克服するため、個性化教育は一人ひとりへの対応にとどまらず、協働を中核に据える必要がある。加藤幸次は、「個に応じた指導」を深化させるために、学習プログラムに協働的な学びを取り入れ、「集団性・社会性」の視点から再構成することを提案する。とくに、不確実な現代的課題に対応できる資質・能力の育成を教育の使命と位置づけ、複数の協働学習の形態や、探究を繰り返し深める学習方法を示している。これらの議論は、協働的な学びこそが、孤立や格差を防ぎ、共に学び合いながら人を育てる個性化教育の鍵であることを示している。

3. 実践研究の展開・まとめ

本実践研究は、「個性化教育」を軸に、主体的・対話的で深い学びを学校現場でいかに実現するかを、二校における自由進度学習と探究学習の実践分析を通して検討した。実践の中で、個性を他者との対話や協働の中で培われるものとして実践をすすめた。実践の分析から、子どもが自ら問いを立て、仲間と議論しながら問題を解決する過程が、個性の形成を促すことが明らかになった。個別学習と協働学習を相互に補完し合いながら循環することで、学びは深まる。その実現には、学校全体でのカリキュラム・マネジメントが不可欠である。以上より、「個性化教育」とは、個を孤立させる教育ではなく、他者との関係性の中で自らの学びを構築し、自律へと向かうプロセスを支える教育として再定位していく。